

イエ社会論は有効か

橋爪大三郎

はじめに

日本人が、自分たちの伝統的な家族のあり方として、まず思い起こすのは「家」であろう。最近でこそ意識する機会も少なくなつたものの、冠婚葬祭の折り節などには、やはり「家」が生きていることを思い知らされる。「古きよき日本」のイメージは、「家」抜きに語れない。

「家」は今、伝統ではあつても、不在である。戦後社会は、「家」を神棚からひきずり下ろし、お払い箱にした。かつて「家」の姿をまもっていた家族や人間関係は、戦後社会のなかで、変容と変貌を重ねている。

日本人が「家」について抱くイメージを範型として、日本の社会を分析し、説明する議論を、イエ社会論という。(ここで「イエ」とは、われわれの歴史的体験である「家」を、人類学、社会学など社会科学の方法論によって抽象化した、モデルを指す。) イエ社会論は、日本人のアイデンティティを明らかにし、日本社会の独自性をつきとめようとする場合に採られる、典型的な議論のスタイルのひとつである。

ある。

本稿では、日本社会を、イエ社会として特徴づけることの是非を考えてみよう。

イエは、日本にしかない「家」をモデル化したものであるから、これを下敷きにすれば、たしかに日本社会独自の側面を描き出すことができる。けれどもその一方、かえって見えにくくなってしまふ別な側面もあるかもしれない。日本社会はほんとうに、イエをかたどって出来上がっているのだろうか？

1 イエ社会論の位置

イエ社会論が地歩を得たのは比較的最近、つまり、この二十年ほどのことである。それ以前、日本の「家」は主として二つの学問によって研究されていた。ひとつは社会学、もうひとつは人類学である。これらの学問は、「家」をどのように扱ったのだろうか？ また、これらの学問とその後に登場したイエ社会論とは、どのような関係にあるのだろうか？

社会学は戦前から、さまざまな実地調査を行ない、日本社会についての実証的なデータを蓄積してきた。その成果が、たとえば有賀喜左衛門や中野卓の業績である。社会学者は、農村の調査や商家同族団の研究を通じて、「家」制度の具体像をあぶり出した。そしてそれを、社会学の一般的な概念や用語によって表現した。農村社会学や家族社会学は今日でも、この枠組みをほぼ踏襲している。

社会学は、参与観察や統計調査といった、実証的な手段によって社会に接近することを重視する。そのため、眼前の観察可能な「農村」や「家族」からデータを蒐集することに作業の範囲を限定する。そ

ここに収まらない過去の伝統的な「家」のあり方や、それが日本の産業化や近代化にどう影響を残したかという同時代的な拡がりまでは、なかなか議論しきれない。そういうスケールの大きな問題は、宿題として残っている。

いっぽう人類学(文化人類学とか、社会人類学とかいうこともある)は、戦後、いまのべた社会学とは別系統の学問として出発した。

そのうち最もオーソドックスな機能主義の人類学は、出自(Descent)など、血縁関係を分析的に記述するところから出発し、その上に社会構造、機能などの概念を組み立てている。これらの分析概念が、あらゆる文化・社会に共通する普遍概念であるのが、人類学の特徴である。人類学の立場からは、イエをつぎのような親族集団と特徴づけるのが、ほぼ定説となっている。

- (1) (結婚した)傍系親族を含まない。
- (2) 直系の夫婦を幾世代か含むことができる。
- (3) 婿養子や、両養子による継承が可能である。

親族集団を、核家族の複合とみる場合には、イエは「直系家族」の一種だということになる。けれども日本の「家」は、いまのべた親族集団の枠にとどまらない社会制度として発達し、藩やさまさまの経営体として、重要な働きをしてきた。こうしたことは通常、人類学の視野の外に置かれている。

*

人類学をベースに、現時点での日本社会をトータルに捉える試みとして、中根千枝の『タテ社会の人間関係』(一九六七年)がある。これは、企業組織に典型的にみられる、日本社会に独特な組織原則を、

人類学のアイデアを応用して説明するものだった。イエ社会論の先駆と言える業績だが、過去の日本社会も視野に収めようとする通歴史的な目配りをしていただけではなかった。というのは、人類学はふつう、社会構造(親族の構成原理)は不変である(もしくは、きわめて変化しにくい)という仮説に立っていることもあり、信頼性のうすい過去のデータにあまり重きを置かないからである。

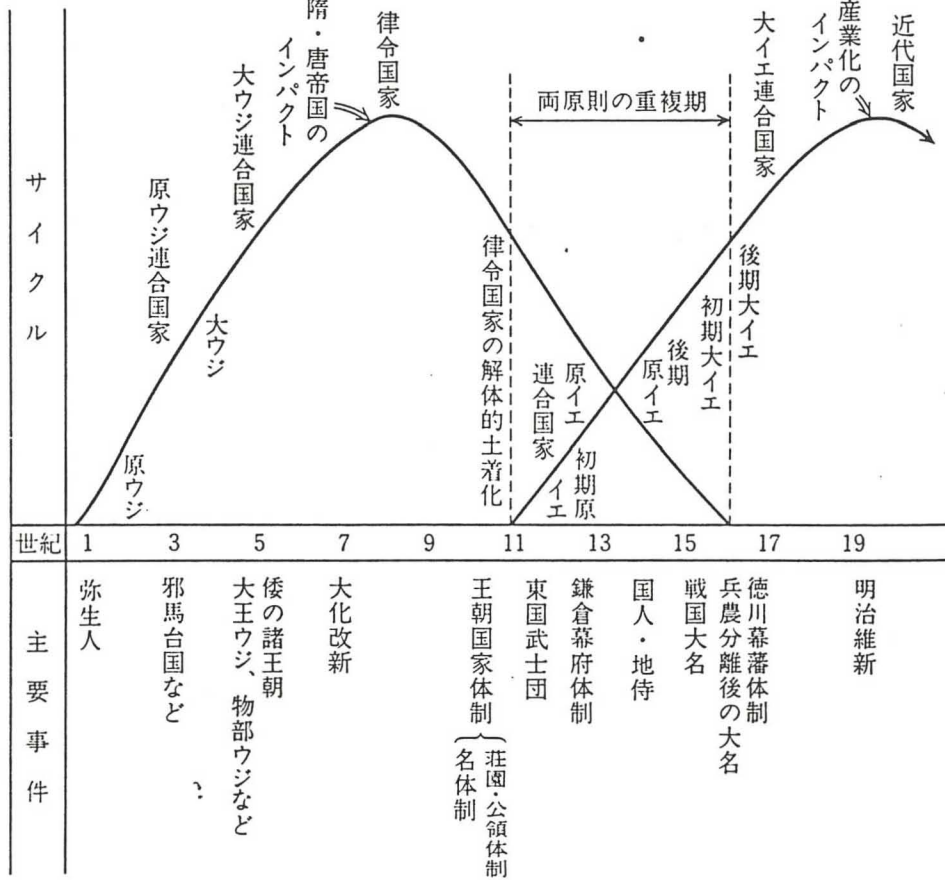
そういう点から言えば、イエ社会論のもつともスケールの大きな業績は、村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎の『文明としてのイエ社会』(一九七九年)である。この書物は、方法から言っても、人類学にとどまらず、社会学、歴史学、システム理論などにまたがり、対象から言っても、近世社会はもちろん、遠く日本の古代から有史以前にまでさかのぼる、雄大な構想をそなえている。そこで以下、これを、イエ社会論の特長が最大限に発揮されたものと考えて、少し詳しく検討してみたい。

2 『文明としてのイエ社会』の、論理構造

『文明としてのイエ社会』のモチーフを、ひと口で言うと、『日本社会の歴史を、固有の組織原則が内在的に展開していく過程として、完全に再構成すること』となるだろう。

著者たちの大胆な見解によると、日本社会の展開過程は二つのサイクルからなる。ひとつは、「ウジ社会」のサイクル。もうひとつは、「イエ社会」のサイクル。前者は、卑弥呼の時代から、大和朝廷政権の成立、律令制の受容を経て、王朝国家が盛衰するまでにほぼ対応し、後者は、武家政権の興隆から日本の近代化に至るプロセスにほぼ対応する。ゆるやかな上昇のカーブを描いて頂点に達したあと、再

日本史の見取図



出典：『文明としてのイエ社会』190頁より

原イエ連合国家↓大イエ↓大イエ連合国家、の順に発展していくという。

核主体として最初に存在したのは、関東の武士団、すなわち《東国型の開発領主を中心とする自己永続的な集団》だった。

これを、ウジ社会のサイクルとは違った《新しい核主体とみなし、「原イエ」と名づけ》る(三〇二頁)。原イエはさらに、鎌倉期の、惣領制のような《同族団構造を内に含んでいる原イエ》(三〇九頁)、すなわち「初期原イエ」と、室町期の《嫡子相続および一円領支配の形式を備えるにいたった段階での原イエ》(三二八頁)、すなわち「後

び下降していくとされるこの二つのサイクルが、日本歴史の大枠を決定しており、現代日本社会も、このイエ社会のサイクルのなかに置き直すことではじめて正しく理解できるというのが、著者たちの主張だ。

*

この書物の内容を、なるべく著者たちのイエ社会論に焦点をしぼって、要約してみよう。まず、それぞれのサイクルは、どのようなものであるのか。

ウジ社会のサイクルは、原ウジ↓原ウジ連合国家↓大ウジ↓大ウジ連合国家、の順に発展していくのだという。その概略は、つぎのようである。

《弥生人は……成層クランを核とする社会組織を発展させていったと思われる。そして、ウジ社会の出発点をなしたのは、この成層クラン型の核主体であったと考え、これを「原ウジ」とよぶことにした》(一九四頁)。ここで核主体というのは、《新たな発展の出発点としての可能性を秘めた自立的な集団》(七七頁)のことである。そのあと、《おそらく……元来は複数個の原ウジであったものが征服―被征服の関係を通じて重層的に結合》した集団が生まれてくる。《われわれはそれを「大ウジ」と呼びたい》(二九九頁)。五世紀ごろの大和朝廷は《大ウジの複合型連合国家とも呼ぶのがふさわしい性格のものであった》(二〇一頁)。これが主として外圧を契機に、統一的な律令国家へと転換していくが、その過程で大ウジも解体・変質していく。《大ウジの解体後に出現してくる……血縁集団のことを「準ウジ」と総称しておきたい》(二〇九頁)。

いっぽうイエ社会のサイクルも、ウジ社会のサイクルの場合と似たような過程をたどって、原イエ↓

期原イエ」に区別される。後期原イエは、国人一揆のように「一揆型拡大」をとげるか、あるいは、戦国大名のような「倣い拡大」をとげる。《倣い拡大によって形成された後期原イエの上位主体のことを……「大イエ」と総称する》(三三〇頁)。

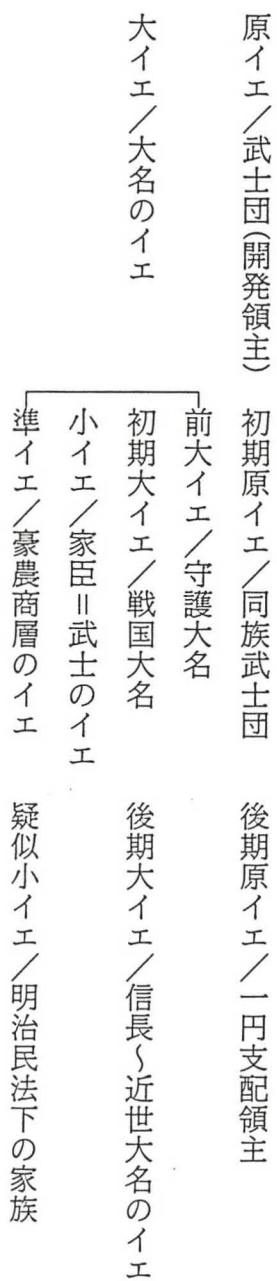
著者たちの理解では、《イエは、具体的な集団というよりも、通時代的なひとつの集団形成原則》であり、それは《四つの基本的性格からなっている》(二一三頁)。すなわち、《(1)超血縁性、(2)系譜性、(3)機能的階統制、(4)自立性》(二二四頁)の四つだ。こうした原則が、ある主体に対する上位主体を創出する際に、反復して適用されるのが、倣い拡大である。倣い拡大については後述する。

ところで、ウジ社会／イエ社会のサイクルは、完全に分離しているのではなく、一部が重なりあっている。具体的に言うと、前者は一世紀から十六世紀まで、後者は十一世紀から現代(以降)までとされており、中間の五百年間で、両者は重なっている(前頁図参照)。重なっている部分があまり大きいと、両者は別のサイクルなのだろうかという疑問が生まれても不思議はないが、重要なのは、日本の歴史が連続したものでなく、二つのサイクルからなると著者たちが主張していることだ。現代の日本社会は、そのうちイエ社会のサイクルにあるわけだから、その組織原則は、ウジ社会の原則や(古代の)天皇制と直接関連をたどれないと考えるべきだ、ということになる。これは、『文明としてのイエ社会』から導ける、重要な結論のひとつだ。

*

ウジ社会／イエ社会のサイクルは、それぞれどういうダイナミズムによって展開していくのか？
イエ社会のサイクルを見てみると、まず気がつくのは、原イエ、大イエなどが、歴史学上の概念とき

れいに対応するようになってきていることである。



こうしたイエは、そのどれもが「主体」——《自らの目的のために適切な行為を一貫して選択している」とみなしうる存在》(二二二頁)——である。主体が集まったものが「社会システム」だが、《社会システムのうちでも、とくにそれ自体が一個の主体ともみなせるものを、「複合主体」と呼ぶ》(二五七頁)。複合主体は、その要素である「下位主体」のうえに立つ「上位主体」だと言えるから、大イエとは、原イエが集まってできた複合主体にはかならない。

下位主体はさらに、上位主体への依存の度合いに応じて、上位主体から自由に脱退できる「可換体」、上位主体との関係でしか存続できない「通過体」、上位主体の間を自由に移動することもできない「依存体」、に区分できるといえる。たとえば、近世武士のイエ(小イエ)は、大イエの依存体である、等々。

著者たちの説明によると、初期の段階のイエが上位主体を作り出し、また互いの結びつきを徐々に変化させていく歴史的なプロセスは、《(1)社会システムの物化傾向、(2)社会システムの倣い拡大(ないし倣

い縮小)傾向》(二六二頁)の二つに導かれたものである。物化とは、《一連の認識プロセスの進展およびそれに対応して生ずる社会システムの「実在性」の増大過程のこと》(二六三頁)。平たく言うと、たとえば、原イエの上位にいつのまにか大イエが存在し始める、というようなことだ。物化が進めば、その要素は、可換体↓通過体↓依存体となって、上位主体の課す特定の機能を果たすだけの存在に変化していく。いっぽう倣い拡大とは、《新たに形成される上位主体が、その下位主体自身の組織原則をそのまま拡大適用している場合》(二七四頁)、たとえば、多くのイエを統括する上位主体もやはりイエである、というようなことだ。

こうした発展のプロセスは、著者たちによれば、ウジ社会にも共通するものである。ただし、ウジ社会については、もともとなるデータがイエ社会に比べてあいまいであるようにみえる。ウジ社会のサイクルは、イエ社会のサイクルからの類推にもとづいて想定されたのかもしれない。

*

以上の議論の論理的骨格を整理してみよう。

『文明としてのイエ社会』は、ウジ社会のサイクル/イエ社会のサイクルの発展を、それぞれ

- (1) 集団と社会システムに関する一般理論
- (2) 日本社会の内部で固有に働く力学
- (3) 偶然的な外的要因

の三つのレベルで、説明する構成になっている。(3)の外的要因としては、古代中華帝国のインパクト、近代西欧文明のインパクトが、それぞれ考えられているが、どちらかと言うと、これらの役割は副次的

だ。著者たちの努力はもっぱら、(1) (2)を組み合わせて、日本の歴史を、内在的な社会発展のプロセスとして再構成することに向けられている。

(2)の、日本社会に固有の力学には、ウジ社会の組織原則、イエ社会の組織原則の二種類がある。これが中世を境に切り替わったとみる著者たちは、二つの別個のサイクルの存在を主張するわけである。日本の近代はこのうち、イエ社会のサイクルに位置するので、イエ社会の組織原則に支配されていると理解されている。

著者たちのイエ社会論にとって重要なのは、イエのさまざまな形態や、その歴史的な変遷を、もっぱら社会システム(自己組織システム)の内在的・自律的な論理にもとづいて説明しようとしていることだ。組織原則を重視するイエ社会論は、所有形態(経済)や統治形態(政治)にもとづいて時代区分を行なってきたこれまでの歴史学とは、ひと味ちがった日本社会の像を提示する。物化傾向や倣い拡大の傾向は、社会の内部で自生的に生じる変化であるから、イエ社会論は、外的要因のたすけを借りない、いわば「文脈自由(context free)」な説明原理をそなえていることになる。

こうした説明原理は、日本社会の歴史的な変遷や組織の特徴を、うまく解明できるのだろうか？

『文明としてのイエ社会』は、上述したように、歴史的なデータに合わせて一連のイエ概念を組み立てているわけだから、現実とかなりよく対応しているようにもみえる。しかし、原イエが大イエに発展し、大イエが江戸幕藩制を経過して、近代日本をむかえるという日本史の道すがら、首尾一貫した論理で説明されているかは、よく検討しないと何とも言えない。次節では、これを考えてみよう。

3 権力の効果としての、イエ

われわれがふつうにイメージする「家」は、江戸時代の武士階級の家(小イエ)である。幕藩制のもとで、イエ型の組織原則が、ある典型的な現れかたをした。

ここで根本的に疑問になるのは、幕藩制下の家が、著者たちのいうイエ社会のサイクルのなかで、自然に、いわばノーマルな形象として、現れてくるのだろうかということだ。

藩主に仕える各小イエのあり方や、藩の経営体としてのあり方が、明治維新以後の日本の近代企業の組織原則に継承されていった、とイエ社会論はいう(いわゆる中間集団論)。これは、妥当な指摘であろう。のちのち企業組織が機能するための社会的条件が、藩を経営する武士層の行動倫理のなかで準備されたのではないか、と私も思う。けれども、幕藩制下の家の特徴づける組織原則は、江戸時代よりもっと前、イエ社会のサイクルが始まった最初から働いていたかどうか疑問である。

イエ社会のサイクルには、明らかに二つの局面(フェイズ)が区別できると思う。前半は、鎌倉時代の武士団の形成にはじまり、元和偃武(戦国時代の終了)まで。後半は、江戸時代。これを、組織がどんどん拡大する時期/組織がこれ以上の拡大を許されなくなって固定された時期、の別だと理解してもいいだろう。

武士団とはすなわち、戦闘集団であり、所領を活動の基盤にしている。戦闘に勝利することを通じて、所領を拡張し、組織を拡大するのが本来の姿だ。戦闘に勝たなければ、相手の所領は自分のものになら

ない。つまり、この時期のイエ組織はイエの「外部」を必要とする。源氏一門にとって、それは平家であったし、戦国大名にとっては、互いがそうだった。ところが、江戸幕府の成立とともに、その前提がくつがえってしまう。江戸幕藩制のもっとも基本的な戦略は、「移動の禁止」だった。身分、居住地、経済規模などを固定化し、人びとを、境界の変更を禁じられたセル(小胞)のなかに閉じ込めることであった。

こういう「監禁の構造」を、非常に広い意味での、権力の発動とみなすべきだろう。この新しい権力が発動する以前と以後(イエ社会のサイクルの前半と後半)では、権力のあり方がまったく異なったものになってしまったのである。

ここで、さきほどの根本的な疑問を、つぎのように言い換えてもいい——イエ型の組織原則(ないし行動原則)は、以上のような新しい権力の恒常的な効果がなければ、生まれなかったのではないか？

*

江戸幕府の権力は、百年以上にわたって続いた戦国時代に対するアンチテーゼとして理解できる。

戦国大名(大イエ)は、所領の一円支配を基礎にしている。そのため、大イエ同士は排他的に対立しあうほかはない。それが戦乱を帰結したわけだが、その戦乱を最終的に停止する技術として、幕藩制は編み出された。幕藩制の技術は、戦乱を抑止するに十分な力をもった作用、すなわち権力の技術にほかならない。

ここで用いられている技術が、イエ的なものであるかどうか、根本的な問題である。

たとえばイエ社会論は、大名を主君とする藩の構造を、イエの重層(倣い拡大)と考える。しかし、大

名(主君)と武士(家臣)との関係は、イエ的な行動原則にもとづくのだろうか？

主君の家も、家臣の家も、たしかに同等の「家」である。それぞれ、苗字や紋どころをもち、「家」として代々存続していく。いっぽう藩は、主君の「家」と、そのまま同一のものではない。ちょうど商家の場合に「奥」(家の私的な部分)と、経営体としての公的な部分とが分離しているように、主君の「家」と公的組織としての藩とも、分離している。藩は、主君の「家」と家臣の「家」とが出会う、特別の枠組み(固定された社会的文脈)を与えるものなのだ。

藩の政治的な現況(隣国との境界、石高、城の数と規模、兵員数、武器の量と質、……)を固定したのは、藩の外から働く力である。この固定された文脈に、各「家」は適応し、その文脈を再生産していくよう強いられた。藩主の「家」は代々藩主を輩出し続け、家老、……、足軽の「家」もまた代々、その地位と禄高を世襲していくように運命づけられている(もちろん、若干の例外はある)。そのもとで、各「家」は当然変質を強いられる。ちょうど、もともと丸かったシャボン玉が、いくつも集まることで多面体に変形するように、「家」も幕藩制の固定した社会的文脈のなかで、その形態や機能を変質させるのである。その変質をひきずっている今日のわれわれは、変質する以前の戦国期(までの)「家」について、明確な知識やイメージを持ち合わせていないことになる。

諸大名(大イエ)の勢力バランス(均衡解)を、現状のままに固定すること。それが、幕藩制が与える秩序の本質である。幕藩制の与える社会的文脈のなかで、武士集団の「家」は、その組織原則や行動原則を変化させざるをえなかった。戦闘集団が、その本来の任務である戦闘を禁じられてしまった。仕方なしに武士は、儒学を素養とする、藩の行政官僚に転じていった。

幕藩制の権力構造と、それが「家」に与える効果について、イエ社会論はあまりに無自覚ではないだろうか。

*

上は幕府の行政機構から、下は農村、町内の家々にいたるまで、江戸の幕藩制は残らずイエを規準とする社会であった。それが明治以後の近代化にともない、徐々にそれを離脱していく。西欧の形態を模した国家機構。代々受け継いできた家業の基盤を失なって、ばらばらな近代家族になり下がってゆく家々。ただ企業や官庁組織のような中間集団だけが、かつてのイエ社会的な行動原則を比較的良好に保存している。——このような著者たちの指摘には、うなずけるところも多い。

たしかに、幕藩制が培った多くの行動様式が、今日の日本企業に受け継がれ、典型的な日本人の性格・行動類型をかたちづくった。けれども、こうした行動様式が、戦国期や室町時代、つまりイエ社会のサイクルの前期とされる時期にまで遡って見出されるという証拠は、どこにもない。やはり幕藩制の成立に、かなりはつきりした断絶があり、その後から、たとえば家元制のような、われわれがイエ的なものとしてよく知っているような形態が出現し始めている(西山(一九八二)ほかを参照)。

もうひとつ考えなければならぬのは、幕藩制の権力構造と、明治近代のそれとが根本的に異質であり、断絶していることである。たとえば、幕藩制の権力が与える効果は、公共性と私性を未分離のままに放置している。

藩がイエとして機能する場合、中心になるのは、主君と家臣との忠誠関係(二者関係)である。このような二者関係をその外から問題にすることができる、広汎な議論の場が存在すれば、それは公共的な関

係に転化できるかもしれない。けれども、主従の関係は原則的に二者だけの問題であって、たてまえ上それ以外の人間がその関係のあり方を問題にすることはできない。

社会関係のすべてを大小のイエで被覆する幕藩制の戦略は、他者同士が出会う可能性を慎重に排除する。ひとがどのイエに所属するかは選択できない。したがって、人びとが選択的に社会関係を作りあげていくこと(アソシエーション)も存在できない。村落のなかで、町内において、……あらゆる場所において、異なる村落、異なる藩の人びとの横断的な社会関係それ自体が危険視される。切支丹や一向宗の禁圧も、この戦略に欠かせないものだ。人と人が出会う社会的文脈をきちんとコントロールすることが、この戦略の根本である。それには、現実に関係を結ぶことのできる相手の範囲を、既知の関係の内部に限定しておくことだ。そうすれば誰もが、自分を自分の帰属する集団と一体視したままで、相手と関係をとり結ぶことになる。

こういう社会では、たとえば「議会」という発想は生まれえない。異なる集団に所属する異質な人びとが対等な資格で、公的に(つまり、社会的な文脈と無関与に)言論を戦わせる余地がないからだ。もちろん、選挙という考え方もなじまない。

幕藩制の戦略は、幕藩制の解体とともに効力を失った。もちろんその影響は、今日まで及んでいる。たとえば、議会での証言よりも、企業への忠誠心が重視されること。裁判に対する人びとの信頼が薄いこと。こうした発想や行動様式は、幕藩制権力の効果によるものと言えよう。けれども江戸幕藩制と近代日本との間には、権力の編成原理に関して、大きな断絶がある。社会の推移を組織の内在的な発展のプロセスとしてたどろうとするイエ社会論は、こうした断絶を説明する論理を持たない。

*

村上らの「イエ社会論」は、こうした権力分析への配慮を欠いているため、現代日本社会の診断学として、問題を残していると言えよう。要約するなら、つぎのような問題だ。

(1) 天皇制の過小評価。——天皇制は、イエ社会以前の、ウジ社会のサイクルに属する、とされる。したがって、その天皇制が武家社会(イエ社会のサイクル)に温存されたのは、偶然的な事情によるとされる。けれども、幕藩制(戦国大名の戦乱を停止させるシステム)に、天皇は不可欠の要素だったのではないか。そのことの分析が、どうしても甘くなる。

(2) 日本近代についての楽観。——日本の近代化が、先行する社会の与える条件を活かすことで成功した、というのは正しいであろう。けれどもそれは「追いつき型の近代化」を支える条件にすぎないのであって、それ自身、西欧近代のあり方とはかなり違ったものである。これからはむしろ、そうした条件(日本社会の特性)がマイナスに働きはじめる可能性も考えるべきである。

(3) 近代の見方が一面的。——著者たちは近代化を、産業化とほとんど同じことと考える傾向がある。日本はたしかに、経済的には成功を収めたかもしれないが、近代を構成するそれ以外のさまざまな価値を体得したとは言いがたい。宗教、哲学、科学技術、政治制度、……それらの多面的な全体を近代と考えば、日本はそのかかなりいびつな一例をこしらえたにすぎないのではないか。

村上らの「イエ社会論」は、日本の将来について楽観的である。それは、たとえばK・V・ウォルフレンの『日本／権力構造の謎』の与える印象と、正反対のものだ。私は、ウォルフレンの分析のほうに、現実味と説得力を感じる。「イエ社会論」は、日本社会が国際社会のなかで異質であることがもたらす

深刻な問題を、切実に受け止めていないように見える。

4 「イエ社会論」から何を汲みとるか

われわれがとりあげた村上らの「イエ社会論」は、こうした議論の最大の可能性を示すものだった。村上ら三人はその後、この改訂版を用意していたとも聞く。けれども、一九七九年に出たこの版に、ありうべき「イエ社会論」の基本的なモチーフは出尽くしていると考えてよい。

*

「イエ社会論」は、何を語りうるか？ そして、その限界はどこにあるか？

ある社会には、その基礎になる集団というものがあって、その集団の与えるイメージをもとに、人びとは社会行動を営む。われわれの場合、それは「家」であろう。だから、それを補助線にして、その社会のそれ以外の部分を考察していくことに、何ら問題ない。

けれども、この補助線が万能でないことに注意すべきだ。「イエ社会論」というものは、日本社会のあらゆる領域にそれを当てはめようと、それを過去へも遡らせようとする。こうして、日本社会のいたるところにイエ（もしくはその変形）が発見されている。

そこで位置づけがおろそかになっているのは、イエを配置している力学だ。

村上らの「イエ社会論」は、このイエを配置している力学そのものが、ふたたびイエのロジックだとする。これが「倣い拡大」にほかならない。こう考えることで、「イエ社会論」は完全なものになるの

だが、果たしてその通りだろうか？

中国社会と対比してみると、その通りであるように見える。伝統的な中国社会は、親族集団(宗族)の血縁的紐帯が底辺を支え、その上部に、血縁とは別個の原理にもとづく官僚機構(儒教的統治原理)が乗ったものだった。皇帝の継承は血縁によるけれども、それ以外の部分は、できるだけ血縁と関係なしに運営する。こうしたシステムが完成をみたのは宋代(科挙の成立)だったが、日本に律令制が伝わった唐代の社会も、かなりそのシステムに近づいていた。

日本社会は、中国から律令制(官僚制)を導入したものの、それはなかなか根づかなかった。根づかないというよりも、時をへるうちに雲散霧消してしまった。平安王朝国家は、天皇家と藤原氏を軸にする血縁の力学で動いていたし、武家政権にしても、幕府の官制はきわめて簡単なもので、いわゆる「封建的」な主従関係が実質だった。だから、近世の社会を、基礎集団であるイエの上部に、さらに大きなイエが覆いかぶさった二重の構造のようにとらえるのも、あながち無理でないように見える。

だが、それでも、イエとイエとを配置する力学は、イエの論理でありえない。それは定義上、イエの内部に働くのとは異なった力学である。幕藩制はこのような力学によって形成され、また崩壊したと考えるべきであろう。そしてその力学が、イエとイエの関係、ひいては、イエに帰属する人びとの行動様式を決定した。「イエ社会論」は、イエが自立的に展開していく論理に関心を集中させることとひきかえに、イエを拘束する力学に鈍感とならざるをえないのである。

自分の属する社会に働く力学を、正確に理解することはむずかしい。まして日本人は、社会科学の必要性を、つい百二十年ほど前までほとんど感じなかった国民である。「イエ社会論」は、日本人が自分

たちの社会を統一的に理解しようとする大胆なスケッチを提供した。けれども、日本の社会に働き、われわれを捕らえる力学(匿名の権力)の實質について、十分に理解を示したとはいえないと思うのである。

参考文献

- 今谷明『室町の王権』中公新書、一九九〇年。
 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎『文明としてのイエ社会』中央公論社、一九七九年。
 中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社現代新書、一九六七年。
 西山松之助『家元の研究』(西山松之助著作集第一巻)吉川弘文館、一九八二年。
 清水昭俊『出雲の(家)制度(その一)(その二)(その二統)』『民族学研究』三五巻五号一七七一―二五頁、三七
 巻三号一八六―二一三頁、三八巻一号五〇―七六頁、一九七〇―七三年。
 K・v・ウォルフレン『日本／権力構造の謎(上・下)』(篠原勝訳)早川書房、一九九〇年。

はしづめ だいさぶろう

社会学。一九四八年生まれ。東京大学文学部卒業。現在東京工業大学工学部助教授。著書に『言語ゲームと社会理論―ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』、『仏教の言説戦略』、『はじめての構造主義』、『性愛論』(小社から近刊)。



日本社会の特質と家族

杉本良夫 金井壽宏 橋爪大三郎